

あるじでえ

No. ⑨

世田谷区教育委員会 民家園係
〒157-0067 世田谷区喜多見 5-27-14
◎ 次大夫堀公園民家園
☎ 03 (3417) 8492
◎ 岡本公園民家園
☎ 03 (3709) 6959

平成 2 年 3 月 1 日 発行
平成 7 年 9 月 15 日 改訂
平成 12 年 6 月 増刷
平成 16 年 5 月 増刷



ひ な 祭 り



3月3日のひな祭りには各家庭に美しいひな人形を飾り、これに白酒や菱餅などを供えて女の子の成長を祝います。女の子が生まれて初めてのひな祭りを特に「初節句」として重要視し、親戚や友人からひな人形が贈られます。

現在のように十二単の内裏びなや三人官女・五人囃などを雛壇に飾る雛飾りは江戸時代中期頃の武家や富裕な町人たちの間に流行し始めましたが、その後しだいに農村へとも広まっていきました。昭和にはいつてからはデパートなどの宣伝も手伝って、さらに華やかなひな人形がもてはやされるようになりました。

そもそもひな人形の起源は冬から春の季節の変わり目に行なわれていた祓えの行事（身体に付いた目に見えない災いや穢れを取り除くこと）であったようです。平安時代の貴族たちは3月上旬巳（3月始めの巳の日。中国の暦法では子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥を使って年や日を数えていましたが、巳はその中の一つです。）に水辺に出て、ヒトガタで身体を撫でて、それに身体の穢れや災いを移す、祓えの行事を行っていました。この時のヒトガタは河や海に流し捨てます。3月始めの巳の日は後に中国の重日思想（3月3日、5月5日、9月9日のように月と日が同じ数字になるもの。）の影響を受けて3月3日に固定されていきました。

民間でも人形を河や海に流す行事が古くから行なわれています。紙や土で作られた河や海に流すための人形を「ナガシビナ」と呼び、人形を流す行為を「ヒナオクリ」と呼んでいます。たとえば、鳥取県地方では3月3日の夕方に女の子たちが火を灯して紙の人形を河へ持って行き、この人形に菱餅や桃の小枝を添えて棧俵に乗せて河に流します。和歌山県や奈良県でも紙で作ったひな人形を河に流す行事があります。また三重県三重郡では「カズラサマ」と呼ばれる葛で作った人形を3月3日に海に流しますが、この時には「カズラサン、カズラサン、また来年おいでな。鯛こで祝お、鯉こで祝お」と唱えるそうです。

以上見てきましたように、古代の宮廷で行なわれていた祓えの行事や各地で行なわれています民俗行事としての「ナガシビナ」が現在のひな祭りの基盤であったと考えられます。すなわち、本来は季節の変わり目に古い穢れを身体から移し取って流し捨てていた人形がしだいに高価で精巧な物となり、鑑賞用として毎年同じ人形が使われるようになったと推測することができます。宮廷での祓えの行事が巳の日に行なわれていたのも、巳は蛇として考えられていますから、蛇が古い皮を脱皮して生まれ変わるように、人もこの祓えの行事を行なうことで古い穢れを捨て去ることができるものと信じられていたのでしょう。

難壇の飾り方には一定の決まりはありませんでしたが、昭和御大典(天皇の即位式)後から、内裏難の男難を左に、女難を右に飾るようになりました。内裏難の左右にはぼんぼりを立て、中央には徳利を乗せた

三宝を置きます。次の段には三人官女(中央に座り姿で三宝を持つ者、向かって右は長柄鉾子を持つ者、左には加鉾子を持つ者)を飾ります。3段目には五人難を飾りますが、この並べ方は能の囃方に倣って、向かって右から扇を持っている謡、次が笛を持つ者、中央が小鼓を持つ者、その次が大皮鼓を持つ者、一番左が太鼓をたたく者の順に並べます。4段目には左大臣、右大臣を置き、その間に御膳を置きます。5段目には3人の仕丁(雑用を行なう家来)を置き、その向かって左に橘、右に桜を飾ります。



古今難 伊藤さき氏寄贈 (撮影：米畑勝行)



ひがん
彼岸

ひ
彼

が
ん
岸



春分の日と秋分の日をしゅうぶんはさんだ前後各3日の合計7日間が彼岸です。春分の日と秋分の日が「彼岸の中日」で、彼岸の始まりを「彼岸入り」、終わりを「彼岸明け」と呼びます。彼岸入りは春が3月18日前後、秋が9月20日前後で、彼岸明けは春が3月24日前後、秋が9月26日前後となります。

春分の日と秋分の日を中心とした期間は仏教徒たちが悟りを得るための修業期間であったために、仏教の言葉で悟りを意味する「彼岸」がこの期間の名称として一般的に使われるようになりました。しかし現在では本来的な「悟り」の意味は忘れられ、彼岸は先祖供養を行なう期間として考えられています。そのため人々は彼岸の期間に墓参りに行ったり、御馳走を作って仏壇に供えます。全国的に見られる供物としては「入りソバ、中日ボタモチ、明けダンゴ」と言って、彼岸入りにはソバ、彼岸の中日にはボタモチ、彼岸明けにはダンゴが作られます。

彼岸の期間中には各寺院で彼岸会が催されますので、人々は寺院に参拝して僧侶の法話を聞いたり、お経を唱えたりします。というのは、彼岸の中日である春分の日と秋分の日には太陽が真西に沈みますから、これによって阿彌陀如来が住む西方極楽浄土の方角を示すことができます。そこで僧侶は人々に先祖供養を勧め、死後に西方極楽浄土へ生まれ変われるように法話をするのだと言われているようです。

彼岸には寺院を中心とした仏教行事以外にも、盆と同じように先祖の霊を迎える行事が見られます。その一つに「オオジナオバナ」とか「ノビ」と呼ばれるものがあります。例えば秋田県北秋田郡では春の彼岸に丘の上で焚く迎え火を「ノビ」と呼びますが、この火を焚く時に「おおじなおばなあかしもよいし 提燈もよいし 早く茶コ飲むに来とうらエ来とうらエ」と唱えていたそうです。